

経験して初めて思い知る 生と死の深さ



写真／鈴木慶子

小池真理子
【作家】

2009年に父を、2013年に母を、そして2020年に夫を見送り、昨年は愛猫を看取った。友人や作家仲間との別れも相次ぎ、この十年あまりは喪失の連続だった。

加えて、考えてもみなかった疫病が蔓延し、会いたい人と自由に会えなくなった。私ほどの年齢になると、残り時間はそう長くはないので、会えないままサヨナラなのか、と思うことも少なくない。有名な漢詩を「サヨナラダケガ人生ダ」と意識したのは、井伏鱒二という作家だが、本当にその通りだと思う。

同世代の友人と会えば、互いにそこはかとな不安を打ち明け合うことが多くなった。死や老い、病に対する不安……それら未知のものに向けた、曰く言い難い、底知れない恐怖と寂しさ……。

深刻に語るのではなく、笑い話にすることが多いのだが、それでもそれらはすべて本音なの

だ。深刻に語るのはみつともない、という自意識が働いて笑い話に代えているだけなのだ。

若いころには想像もしなかった心象風景と直面せざるを得ない日々が、誰にでも訪れる。経験してみて初めて、生と死の深さを思い知るのである。

夫は2018年春に末期の肺がんを宣告された。もともと病院嫌いで、入院することを極度に嫌がる人だった。彼の気持ち、生き方を主治医は尊重してくれて、検査時以外、入院はしないままの闘病となった。

いつときは治療が大きな成果を上げ、希望が芽生えたが、短い間に過ぎなかった。恐れていた肺への再発が確認されると、たちまちなすすべが失われていった。2020年1月、余命はごくわずかになり、彼は自宅で迎える最期を希望した。私も迷わず受け入れた。

私たちの寝室を病室にし、彼のベッドを介護